四万十町

町内ぶら～り散策

田野々（たのの）①

※現在「田野々」は「大正」に字変更していますが、便宜上「田野々」と表記しています。

田野々は、古く上山郷の時代からの「首都」であり、現在も旧大正町の中心である。まずはこの地区の成り立ちから。

四万十川と檮原川の合流地点。地形的に水に困ることがなかったため太古の昔から人が住んだ。その証として、両河川合流地点周辺では、縄文時代後期とみられる遺跡が数カ所確認されている。各々が接近していることから考えると「集落の始まり」に近いくらいの規模だったのかもしれない。

さらに、地理学的な別の視点で見てみるのも面白い。田野々は盆地でもある。古今東西、周囲を囲う山々に守られた盆地には人が集まり街ができる。平城京しかり、平安京しかり。遠くヨーロッパではケスタといわれる地形のロンドンやパリがそうである。もちろんそれらの大都市の規模とは比ぶべくもないが、二つの河川が合流し水が豊富な田野々は、人が集まりやすい「首都地形」だったとも言えそうである。

首都を田野々とする上山郷の始まりは定かではない。縄文時代、いや、もっと昔から、徐々に人が増えて集落が形成されていったのであろうが「上山」という名が文献に登場するのは戦国期の地検帳が最初である。

地名はさておき、この地が中世以降の「街」を形成していく過程を考える上で、避けて通れないのが熊野神社の成り立ちである。熊野神社の棟札に記載されていたといわれる資料によれば、源平合戦で平氏側に与していた、紀州（現在の和歌山県）の豪族、熊野（田那邉）別当旦増（たんぞう）と、その息子・永旦が、屋島の戦いに敗れ、讃岐経由でこの地にやってきたとあるようだ。しかし、別の記録と研究によると、旦増は正しくは湛増といい、熊野水軍を率いる傑物であり、そして永旦という息子は系図にはないという。さらに、平氏側ではなく、その反対で源氏側についていたのであって、勝者側である湛増がこの地に落ちのびてくるということはありえないというのだ。ただ、湛増は義経と通じていたというから、その後の義経の運命から考えるに、頼朝から追われて落ちのびたとも考えられなくもない。想像は膨らむが、本当のところはわかっていない。

しかし、現在の熊野神社のありようを見ても、これほどの神社を建立できる力を持った豪族がこの地に存在していたことは間違いないとみられている。仮に、有力な在地豪族が存在していたとして、紀州・熊野、田辺との人の行き来があったことは確かであると思われる。田那邉→田辺姓が多いこともその証左であろう。

さて、田野々には「田野々三城」といわれる山城がある。和田林城、遅越城、上山城（土居林城とも田野々城ともいわれる）である。これらの山城は戦国時代初期から中期のものとされている。当時、この地を支配していた上山氏が戦略的拠点としていたとされる。メインとなるのが町の北側の山頂にある上山城。そして、現在の四万十高校の南にあった和田林城が「支城」。さらに、檮原川を挟んだ吾川地区の山には「出城」という位置づけの遅越城。三城は、ちょうど正三角形の立地であり、どこからでも田野々の町を見渡すことができる。また、この盆地に入ってくる敵を容易に監視できるという、絶好のポジションにあることがわかる。これらの城跡には、敵の侵入に備えるための縦堀や堀切などが今も残っており、戦国期の動乱が、こんな山間の辺境地にも及んでいたことを物語っている。

ここが山城跡だったとは思えない、今は長閑な和田林城跡。

町のうごき

（4月30日）	人口	前月比
男	7,619	＋11
女	8,314	－11
計	15,933	0
世帯数	8,200	＋20

	出生	死亡	転入	転出
男	2	14	35	12
女	0	19	27	19
計	2	33	62	31

（4月中の届出）

窪川地域 11,299人　大正地域 2,218人　十和地域 2,416人

四万十川の水質状況

	適正値(mg/l)	5月10日
リン酸	≦ 1.0	測定範囲以下
硝　酸	≦ 0.5	測定範囲以下
アンモニウム	≦ 5.0	測定範囲以下
アニオン活性剤	≦ 1.0	測定範囲以下
化学的酸素要求量	≦ 10.0	0.15

調査：大正（吾川）
資料：四万十高校自然環境部

四万十町通信　2022.6月号　Vol.195　（毎月10日発行）
●発行／四万十町企画課　●印刷／窪川印刷
〒786-8501　高知県高岡郡四万十町琴平町16-17　(0880) 22-3124　FAX (0880) 22-3123

UD FONT by MORISAWA　本文など内容の一部に見やすく読みまちがえにくいユニバーサルデザインフォントを採用しています。